

寄生蜂(ヒメバチ類*Casinaria* sp.)に配慮した ヨモギエダシャクの効率的防除

福島県果樹試験場病理昆虫部
平成14～15年度試験研究成績書

1 部門名

果樹－リンゴ－病害虫防除
分類コード 04－01－23000000

2 担当者

岡崎一博・荒川昭弘・阿部憲義

3 要旨

現行のリンゴ殺虫剤削減防除体系では、8月以降、シャクトリムシ類による新梢葉の加害が多く認められる。そこで、優占種であるヨモギエダシャクの有効薬剤と効率的な補完防除時期を検討した。

- (1) ヨモギエダシャクの幼虫には、天敵であるヒメバチ類が高い確率で寄生しており、重要な役割を果たしている。
- (2) ヨモギエダシャクに対する防除効果は、コテツフロアブル 2,000倍、バイオマックスDF 4,000倍（現在の登録は 2,000倍のみ）が高かった。有機リン剤であるダズバン水和剤やスプラサイド水和剤の効果は低かった。
- (3) ヒメバチ類に対する主要な殺虫剤の影響を検討した結果、コテツフロアブル2,000倍、スプラサイド水和剤 1,500倍およびアドマイヤー水和剤 2,000倍は影響が大きかった。一方、カスケード乳剤 4,000倍、モスピラン水溶剤4,000倍の影響は小さく、BT剤のバイオマックスDF4,000倍は全く死亡しなかった。
- (4) 防除時期を把握するため、性フェロモントラップを用いて、成虫の発発生消長を調べた結果、3回の成虫発生期を確認することができた。防除適期は、成虫と幼虫の発生時期からみて、6月中旬、8月上旬および9月上旬と考えられた。以上のことから、本種の発生が多くなる8月上旬または9月上旬に、寄生蜂に対し影響の小さいBT剤を使用する方法が効果的であると判断された。

4 その他の資料等

なし